

中村武羅夫

夏目漱石

夏
目
漱
石

一

夏目漱石の死は世間並みに、新聞で知った。そのころ私は牛込天神町の借家にいたが（その家は生田春月の家と、すぐに軒を接していた）、そのころの習慣で、朝、目をさますと寢床の中で、まずひとつおり四五種の新聞を読むことにしていた。その時も枕許に揃えてある新聞を取って拡げて見ると、漱石の死が大きな記事になって

報ぜられているのが、私の目を射たのでハツとした。もつとも、その前から漱石の胃潰瘍の再発や、重態であることは分っていたが、この前の修善寺の時には回復したのだし、まさかこんなに早く死ぬことはないような気がしていた。それが四五種の新聞のどれにも、確かに漱石の死が大きく報ぜられているのである。

「漱石が死んだ！」

と思うと私のところは、不思議な寂しさに襲われた。ただ悲しいというだけではないが、涙がたわいもなく流れて、自分でも恥しいほど留まらないのである。気持の調

子かもしれないと思っただが、とにかくあんなことは珍らしい経験である。その後有島武郎や芥川竜之介が死んだ時にも、やっぱり新聞の報道で知っただし、死に方が死に方であるだけに、その報道記事なども相当大袈裟なものだったし、はげしい衝撃を受けたことは事実だが、しかし漱石の死の場合のごとき感銘とはまったくちがったものだった。何か頼りを失ったような空虚と、寂しさと哀しさとだったのである。

そうかといって文学のうえで、ハッキリ漱石を頼りにしていたわけでもなかったし、漱石の生前に漱石の作品

など、一つも感服した覚えもなかった。むしろ当時の自然主義文学の風潮に心酔して、生活派経験派の文学を尊重している私としては、書斎派の文学である漱石の作品など、いくら読んでもどうも物足りない。向う見ずに漱石に向って作品の悪口など言って、ムキになって怒られたことなども何遍かあった。

漱石は、まず私が漱石の作品を読んでいるというところ（愛読しているとは言わない）、いつでもそのたびに、「それはどうも有難う」と言って、必ずずかるく頭を下げるのであった。

だが、すこしでも悪く言うたとすぐに怒って、ムキになつて滔々とうとうと議論をする。元来漱石は理論（ロジックと言つた）尊重癖があつて、なんでもカンでも論理のツジツマが合わないとは承服しない。だから私などの論理を無視した印象批評など、決して受け入れるはずはないのである。——そういう何事でも論理的に整理しなければ承知できない漱石の気質というものは、その作品の構成のうえにも、展開や運びのうえなどにも、よく現われている。と思うが、私の批評などにもすぐにムキになつて、自己の論理で論破しようとして躍起になる。その熱心なこと、

克明で諄くどいこと、すこし病的ではないかと思われるくらいだったし、私などの批評にたいして、あんなにムキになる人も珍らしかつた。

漱石は、自己の論理を固執する一面には、他人の論理を尊重する美德を、決して忘れなかつた。——論理というよりも、言ってみれば私などは屁理屈のようなものだが、それでも論理的運びを付けて説明すると、すぐに釈然とした。そこに漱石の美しい性格と、いかにも教養の高い紳士らしきとが感じられると思うのだが、いつだったか——それは私が漱石を知ってからまもなくのこと

だったと思うが、こんなことがあった。

例のごとく私が訪問記事を取りに行くと、漱石は玄関に突っ立って、露骨にプンプン怒った態度で、

「何用があつて来たんだ」と、言う。

私はかつてがちがうので、何んだかへんだわいと腹の中では思いながら、一つ談話をしてもらいに来たのだというと、

「君は、僕のことを床の間の置物のようなおやじだと書いていただろう」

漱石に反問されても、すぐには私には何のことだか分らないので、ポカンとしていると、

「床の間の置物のような、現代ばなれのしたおやじを訪^{ほう}問^{もん}して、談話をさせても仕方ないだろう。——だから談話はお断りだ」

言い捨てて取り付く島もなく、さっさと書齋に引っ返してゆく。私は慌てて追いすがらんばかりに、

「ちよつと、待って下さい」

とは言っても、はたして私が漱石のことを床の間の置物のような、時代離れのしたおやじだなどと書いたかど

うだか、そんなことはとつくの昔に忘れてしまつて、どうも思い出せない。

だが、書いた当人は忘れてしまつても、書かれた本人がこんなにカンカンに怒っているところを見ると、やっぱり私は、そんなことを書いたにちがいないのである（はたしてその後になつて分つたことだが、私は訪問した文
学者たちの印象記を書いていたので、その「第一印象録」に漱石のことも書いた中に、そんな印象を受けたことを、正直に書いたものであった）。とにかく私は、怒つたまま引つ込もうとする漱石を呼び留めておいて、そこで私

の言い分を聞いてもらった。

私の言い分というのは、「床の間の置物のような」印象を受けたことは事実である。だから正直に、そのとおりに書かざるを得なかった。だが、私の職業は訪問記者である。自分自身としては何と感じようと、職業の建前としては、時の流行作家や大家を訪問して、談話を求めなければならぬ。自己の感情を没してどこへでも行かねばならず、誰でも訪問しなければならぬ。目的は談話を取るにある。だから、どんなことを、私が個人的に感じたからとか、こんなことを書いたからとか、いちい

ちカドに取って追い帰されたのでは訪問記者としての本分が立たない。「床の間の置物のような」印象を与えたことが気に喰わないのなら、怒ってこのまま引っ込んでしまうより、一つ進んでそういう印象を打破するような談話をしてもらいたいと、誠意を披瀝して、吃々^{きつきつ}として弁じ立てたのである。

私の一所懸命さに動かされたのか、その屁理屈に納得したのか、それともムキになって怒っても仕方がないと、だんだん反省したのか、とにかく私が喋っているのを聞いているうちに、しだいに気持が解けてきたらしく、書

齋に通して、談話をしてくれた。それから後はことに漱石のほうでも訪問記者ほうもんの仕事に理解と同情とを持ってくれたし、私のほうでも漱石にたいして、えらい文学者としてというよりも、何か人間的な深い慈味を感じ、親しみを感じたように覚えている。

それには漱石が学校の先生を止して、専心文学をやることになって、本郷から牛込南町に移って来てからは、私は牛込の喜久井町だとか、弁天町だとか、天神町だとか移転はしても、いつでも漱石の家を中心にして円を描いているような動き方をした結果になって、住居が近い

せいもあって、訪問以外にも時々訪ねるようなこともあった。また、漱石が散歩の途上、ひよっこり行き逢うようなこともあったし、がらんとした明るい昼湯の湯槽から、しずかに湯気が立ち昇っているような銭湯で、漱石とたった二人でのんびりと、湯に浸ったり、広々とした洗い場で、いっしょに胃部に濡れ手拭を当て、しずかに揉んでみたりするようなことも、たびたびあった。

漱石の生前、その作品が特に好きというではなかったし、前にも言ったようなわけで、感服していたわけでもなかったが、人間的な無類の慈味には、ふかく親しみも

感じていたし、もちろん自分も文学には野心のあることだから、書いたら一つぜひ見てもらいたいとは、かねてひとりで心に期していたところであった。傾向や、行き方はちがっても、公平な批評をしてくれるのは漱石のほかにはいないような気がして、その点自分ひとりでひそかに信頼しているところが深かったのである。だから漱石の死を知って、何か空虚を感じたのも、涙が留め度もなく流れたりしたのも、ただの感傷ばかりではなく、理由はそんな点に潜んでいたのではなかったか。「力を落した」感じだった。親の死んだ時にも、あんな寂しい気

持を感じたことはなかつたし、涙なんか流したこともないのに、まったく不思議である。

その後も漱石のことは、よく思い出す（それが漱石の文学のことではなく、漱石の人間のことである）。思い出しては、いつでももしみじみと懐しい気がするのである。家庭生活のうえでは病的と思われるくらい、いろいろ激しい癖を持っていた人らしく、それは「道草」などを讀んでもよく分る。漱石が留学から帰朝したころ、長らく女中をしていたという中年の婦人が、その後しばらく私の家で働いていたこともあったりして、その婦人からも

直接に、「道草」に書かれているようなその当時の漱石の日常生活を聞いたりしたこともある。だが、私がいつでも思い出す漱石は、円熟した人格の漱石である。教養の高い、いかにも学者らしく、また高尚な紳士としての漱石であり、温厚で、心の真直ぐな、思いやりが深くて懐かしい人間味にあふれた漱石である。

もつとも、私はたびたび漱石を訪ねても、家庭的な漱石というものを直接には、ちつとも知らないのである。いつも玄関から真直ぐに書斎につづいた座敷に通ったし、漱石は何度訪問しても、決して一度も人を待たせる

ということがなかった。自分が先にキッチンと座敷の座蒲団に坐って、客を迎える態勢をととのえているのである。相對して客の座蒲団が敷いてある。漱石の坐っている座蒲団も、客の座蒲団も同じものである。お茶を出す茶碗でも、すべて客と主人と同じで、これはいっさいが平等でたいへん気持がよかった。家によっては主人の座蒲団だけ別だったり、湯呑み茶碗だけ別だったり、食事の時に箸や茶碗が別だったりという家風があるが、あれはどうも感じがよくない（私も自分で家庭を持ったら、この流儀でやろうとひそかに考えたりしたものであった）。

いっさいが客と同じこと、客に接する態度なども同じで、決し甲乙がない。中村是公とか、その時の何とかいう文部次官といっしょになったことがあるが（それは有名な、漱石が博士号を辞退した時のことだったと思う）、中村是公でも、文部次官でも、訪問記者の中村武羅夫でも、漱石の接する態度は皆な同じこと。これはたいへん気持ちがいいことだが、なかなか誰でもそうはいかない。私の知っている中では漱石のほかには徳田秋声氏がある。そう言えば漱石の人間味と秋声氏の人間味とは、一脈相通ずるものがあって、その点が私などには無条件に魅力

である。漱石はその教養から、秋声氏はその天性によつて、何か人間の感情とか、哀しい神経というようなものにたいして、無限の^{いた}ゆわりというか、慈しみを持っていてくれるようなところがある。そこがややもすれば傷つきやすく、尖りやすく、摺えやすく、常に慄えおののいているような私たちの神経を、知らず知らずの間に庇つてくれる結果になり、その点が私たちを感激させもすれば、親しみを感じさせもするものではないだろうか。——
今になって、そんなことを考えているのだが、とにかく亡くなってから後、すでに二十数年という月日が経って

いるのに、その間には海あり山あり、ずいぶん忙しい月日も過ごしてきているのだが、べつに骨肉でもないのに、どうかした場合にふと思い出して懐しさに浸り、墓参でもしたいという気がするのである（そのくせ一度も、墓参などしたこともないが）。とにかく、漱石の人間的慈味というようなものは、私にはいつまでも忘れられないのである。ほんとうにいい人であった。

訪問記者のような摺れっからの仕事をしていると、何度人を訪ねても、個人的には少しも親しくはならないのが常である。職業のための訪問なので、向うも心から

打ち解けるといふようなことはないのが当然だし、こちらとしてもある限界を越えて、人のふところに飛び込んでゆくといふような——そういう気を許した親しみ方はしないのである。職業を弁え、自分は自分としての矜持を保ち、常に謹しみぶかい節度をもって、そのうえで客間にでも書齋にでも飛び込んでゆく。旗じるしを押し立てて、敵陣に斬り込んでゆくのも同じような気持であると言つても、決して誇張ではない。

だから人が笑顔を見せても、容易には心は許さないし、いくらたびたび訪問したからといつても、決してだらし

なく人に親しんだり、甘えたりしてはならない。——これは私の狷けん介かいな、よくない性格にも依ることだろうが、とにかくそういう躰をよくよく自分に叩き込んでいるので、訪問の仕事から個人的に親しくなるといふようなことは、まったく希まれと言つてよかつた。夏目漱石、鈴木三重吉、それから初めのころにちよつと書いた横山源之助、この三人だけは私が仕事の関係から個人的にまで親しみを感じるようになった人々である。いまやその三人ともすでに亡し矣である。

とにかく漱石は、その時分には時代の風潮と、私自身

の環境と性格とからひどく荒んで、まるでいがみの権太のような無頼の徒と言ってもいいような私などの人間を、一個の独立人として尊重してくれたし、人間的公正と温容をもって接してくれた。——そういう点が、その時に個人的親しみを感じたばかりでなく、いつまでも人間的懐しさとして残って、今になるまで私のところに消えないのであろう。火傷の痕のように、私の心臓にいつまでも残っている。——それは死ぬまで残っているにちがいない。

私は、漱石のところに行くのと、たいてい二三時間くら

いは坐り込んで話をした。そんなにたびたび行つたわけではなかったが、行くといつでも長くなつた。その場合の話というのが、必ずしも文学の話ばかりではない。文学の話などよりもむしろ漱石は、そのころの私のデカダシな気持や、境遇や生活などの話——そういう個人的な話を、喜んで聞くのであつた。十九世紀末の思潮的影響から、懐疑的虚無的な人生観上の苦悶や、ややもすれば退廃に傾きやすい荒みがちの感情や生活や、そういう話にひどく興味を持って熱心に聞くばかりではなく、漱石は自己の哲学を披瀝して、こちらの煩悶に解決を与えて

くれようとするのであった。その誠実さと、深切とは分つても、しかし、漱石の抽象的な立派な論理が、こちらの実感にはどうもぴったりひびかない憾みがあるのは、どうすることもできなかつた。知的矛盾から来る苦悶なら、論理の整理によって立派に解決できるのだらうが、実生活と実感上の現実的な苦悶は、抽象的論理の整理によつては解決されない。

しかし、たといそうであつても、その場合の漱石の人間的誠実や、こちらの病めるところに対する同情や劬わり、そのひたむきな深切というものは、人間的な温かさ

として、ふかく心に刻みつけられ、そしていつまでも貴重な感銘として、忘れられずに残っている。

「夜は皆なが来て賑やかだが、しかし、ゆっくり落着いて話もできないからね。昼の中に来たまえ」

漱石は私に、そう言ってくれた。だから私はいつでも時間を見計って、木曜日のお午ちよつと過ぎに出かけるのであったが、三時四時ごろ、時によると夕方までくらいいることもあった。まだ若い三宅やす子に初めて会ったのも漱石の座敷だった。晩年の滝田樗蔭が、紙や筆をどっさり担ぎ込んで来て、誰がいようが、どんな話をし

ていようが、そんなことにはいっさいお構いなく、自分だけ傍若無人に大きな硯に墨を摺り、さっさと紙を拵げて、赤壁の賦を書けとか何を書けとか、とてつもない大物を書かせて、今度の木曜日までに何とかを書いておいてくれと注文まで残しておいて、でき上った書をこれは素晴らしいとか、ここところがちよつとどうとか、かつてな批評をして、出来のわるいのは置いてゆけと言われるのも関わらず、みんな引つくるめて一抱えも抱えて帰ってゆく。春陽堂の何とか言つた番頭さんが（漱石に二年遅れて、やっぱり胃潰瘍で死んだ）、出版のことで

ひどく叱られていたのも、やっぱりあの座敷だった。いろいろな思い出の残っている書斎の洋室——というよりも和洋折衷の室につづいたあの座敷だった。

漱石は、私が結婚した時に字を書いてくれた。私はべつに紙を買っていったわけでもなかったし、墨を磨ったわけでもないが（たぶん、滝田樗蔭が持っていった紙だろう）漱石は私に字をやるから、この中からいいのを選んで持ってゆけと言って、自分の坐っている後ろの鴨居から五六枚の書をぶら下げて見せた。どれがいいのか、どれでも同じようで、私には分らないで迷っていると、

漱石はこれがよかろうと、自分で選んでくれた。それは何とかカンとか幽樹満川雲と書いたものだった。読み方まで教えてもらって、もう一枚、それはちよつと不出来だからと、漱石が顔をしかめるのをしいて貰って、それはすぐに書画の好きな中根さんに上げた。その何とかカンとか幽樹満川雲は、表装して記念にしておいたのだが、飼い猫がサカリのついた時に、床の間に掛けてあるのに小便を引っかけて、下部の方に少しシミを付けた。後で金子薫園さんが譲ってくれとあまり熱心にせがむので、百円で売った。その時には漱石の書よりも、私

には百円紙幣のほうが有難かったのだろう。

その時漱石は、私に向つて夫婦喧嘩は、まだやらないかと聞くから、まだ大喧嘩はやったことがないし、私の両親が始終大喧嘩ばかりしていたので、子供ごころに夫婦喧嘩は懲り懲りだから、いつまでもやらないつもりだと答えると、漱石は大いに笑つて、

「その心掛けは立派だが、しかし夫婦喧嘩というものは、やらないわけにはいかないものだよ。なにしろ女というヤツは愚劣な動物で、ロジックが通じないんだからね」

と言つて、夫婦喧嘩のコツを教えてくれた。それは女は理屈でも駄目だし、殴つても駄目だ。痛いくらいは平気だし、身に沁みるほど殴るには、こちらが非力だから息がつかない。そこで植木鉢でもいいし、安物の皿小鉢でもいいから、あまり高価でないような瀬戸物を叩き付けてこわすのである。二銭か三銭の瀬戸物でも、力いっぱい叩きつけると、大袈裟な音を立ててみじんに碎けるので、こちらの疝癩はすつと晴れるし、女は欲だけは深いから、音だけの効果に慥えて、これでは世帯が堪らぬと、すぐに閉口するというのである。

「夫婦喧嘩は、安物の瀬戸物を打ちこわすに限るよ」と教えて漱石は、いかにも会心そうな微笑を、例の唇の隅のあたりに縹緲として漂わせるのであったが、その時の風貌が今もありありと目に見ているごとく、私の眼底に残っている。

さてこの一回分は、漱石の人間味について書くことに費してしまったが、私は漱石の文学について、もう一回書くことを許してもらいたい。

二

生前はもちろんのこと、死後に及んでもしばらくの間は——すなわち支那^{しな}事変が勃発した前後のころまでは、鷗外文学と漱石文学とを比較すると、一部の人々を除いて一般的には漱石文学のほうが、ずっと盛んでもあったし、また持て囃されていたと思う。これは文学の本質的なものを計量することの標準にはならないかもしれない

けれども、全集やその他の作品などの普及の量から言っても、たとえば文庫本などに作品が集録されている点から言っても、漱石のほうが鷗外に勝つこと数等だったと思う。

また、専門的に見ても漱石文学のほうが、関心を持たれることが大きく、かつ重きをなしていた。したがって漱石論や漱石文学の研究なども、鷗外のそれに比べるとはるかに多く現われていた。漱石は徯徊趣味を称え、余裕の文学を主張したけれども、何といっても文学に対する態度は真剣で、一本気だった。文学の道に打ち込むた

めには、学校の先生の位置も捨てたし（東京朝日新聞社の社員にはなったけれども）、また、文部省がせっかく与えようという、文学博士の称号をも、辞退してしまつた（多少ツムジ曲りの性癖が加味されているキライなしとしないまでも）。それから時の元勲西園寺公爵が（その当時は侯爵だったが）、有名な雨声会の催しに、文学者の一人として漱石をも招待したのに、断つて出席しなかつた（それは漱石の俗流に伍することをこやうけい潔けつしとしないう偏屈さの現われであるとしても）。とにかく漱石が文
 学者として立つてから以後、その死に至るまでのおよそ

十年間というものは、一途の気持をもってひたすら、文学の道に没頭し、文学の世界だけに生きてと言わなければならぬだろう。

文学に対する漱石のその一轍と、真剣さとは、漱石のすべての作品を通じて、よく現われていると思う。徘徊趣味を称え、余裕の文学を主張し、「吾輩は猫である」だとか、「坊っちゃん」などのごとき風刺小説や、ユウモア小説は書いても、漱石が文学に打ち込み、創作と取り組んでいる姿というものは、まったく血みどろであると言っているほど悲壮である。作品を通して現われると

ころの漱石は、祇徊趣味や余裕などという言葉とはおよそ正反対に傷々しいくらいムキで一途ではないか。「門」の主人公夫妻の生活を見よ。ついには自殺よりほかに行くべき道を見出すことのできなかつた「心」の主人公「先生」の苦悶を見よ。「行人」における兄の懐疑と、「道草」の主人公の狂える頭脳と——およそ漱石の作品に描かれている人物というものは、教養や気品などによって、いくらかカムフラージュされているとは言っても、すべて陰惨と言ってもいいような暗い心であり、憂鬱な雰囲気ならぬはない。生活のうえでは中流階級として多少の

余裕はあるとしても、心理のうえではギリギリの限度において——一歩間違えば発狂か自殺かという危っかしい苦悩の最大限の境目において、苦しみ、藻掻き、喘ぎ喘ぎ生きているみじめな人間の姿ではないか。

それはもちろん、当時の自然主義文学において主として取扱われた貧窮とか、貧乏とか、そういう生活上の苦勞とは違った世界である。漱石の作品に描かれている人物の苦悩というものは、人間の「精神」と「心理」の世界にその基礎を置いている。貧乏などというような、そんな生活や環境上の苦しみではなく、もっと人間そのも

のの本質に即した「精神」と「心理」に根ざした苦しみである。それだけ運命的でもあるし、また深刻でもある。いくら金があれば、それでたちまちどこかへ吹っ飛んで——解消してしまうような苦しみとは性質が本質的に異って、もっと人間そのものの本来性に即した苦悩である。——その点漱石の文学は、いささかギリシア悲劇の脈を引いていると言っている。当時、自然主義文学の一派から考えられていた「余裕の文学」などとは、まったく正反対な「暗い文学」と言ってしかるべきである。

文学に対するその傷々しいまでにひたむきな漱石の態

度に比べると、鷗外の文学に対する態度こそ、ずいぶん余裕があるものと言つてよかろう。漱石が血みどろになつて、傍目も振らず、ただ一筋に文学を生活しているのに比べて、鷗外こそ実験室の中で文学をさまざまに試験している。弄んでいふと言つてもよかろうし、楽しんでいふと言つてもよかろう。ひたムキで一途な漱石は、小説以外は——それも現代小説の形式において、現代の人物を描き、現代人の心理を取扱ふ以外には、他を省みる暇がないのである。ただ一冊、講義を整理して纏めた「文学論」（これがたいした著述である）があるだけである。

俳句と漢詩を少しばかりやったようだが、それも鷗外の短歌や詩ほど多作ではない。晩年になってから絵筆を弄んだが、しかしそれはまったく余技であって、文学こそ漱石が生命を賭けて取組んだ一生の仕事だったのである。

そこへ行くと鷗外の文学は、あくまで余技であったというの他はない。余技でもあれだけの文学ができればたいしたものだと言われれば、それはそのとおりにちがいないのだけれども、しかし、余技にはやっぱりどこか余技だけの貫禄しかないのではないか。——なるほど作品

の形式なども多方面であるし、いろいろな試みもしているし、量としての集積もはなはだ大である。その点我れ我れをしてはなはだ畏敬せしめるところではあるが、しかし、その仕事の質の迫力という点になると、男子の一生をただその一筋にかけて、必死の努力を文学に傾注している漱石の文学には、はるかに及ばないのではないか。漱石の文学には白刃ひらめく真剣勝負の気魄が、惻々として人の胸に迫るものがあるが、鷗外の余技文学は、その一つ一つがはなはだ明るくて、快適である。このごろ傑作の名をほしいままにしているところの「雁」を見よ。

「高瀬舟」を見よ。「妄想」にしても「阿部一族」にしても、取扱われている題材そのものの「暗さ」はとにかく、「暗い」題材を取扱っている鷗外その人の態度はきわめて明るい。いかに作品に打ち込むところがあっても、身をもって書くことのできないこれが知性作家というものの特徴でもあるだろうか。多少の面白さ——興味を感じて読んでも、しかしどこか喰い足りない所以であろう。

私は鷗外の偉大を決して認めぬものではないが、それは主としてあの精力と気根と、頭脳の明快さと、それから膨大な仕事の量に対して感ずるものであって、質とし

ては常に物足りなさを感じている。骨の髄から震いおのかされる態のモノを、鷗外の余技文学が持たないからである。鷗外の文学に対してそんな性質の感銘を求めるのは、それはおそらく求める私のほうが間違っているだろう。それは私にも分っている。が、私は三つ子の時代から今日に至るまで、常に文学に対してただ一つのもの求めてきているのだ。それのない文学は私にとって、あたかも味を失った塩に等しいのである。

漱石が偏屈なまでにただ一筋に、狭い文学の道を歩いたのに対して、鷗外は、その生活のうえにおいてもはな

はだ社会的多様性を帯び、漱石の生活とは好個の対照をなすものと言つてよかろう。漱石はただ一つの文学博士すら辞退して受けなかつたのに、鷗外は本業の医学博士のうえに、さらに文学博士の肩書も持っている。漱石は文学に打ち込むためには、ゆくゆく大学教授の位置にまで進むことを約束された教師の地位を抛つてしまったのに対して、鷗外は陸軍軍医総監というかがやかしい官職を身に持ちながら、盛んに文学上の活動を試み、しかもそのうえ博物館館長であるとか、国語審議会の委員であるとか、いろいろな方面に首を突っ込むし、といつては

言葉がよくないが、とにかく多方面に活躍をつづけた。漱石は文学のうえに名をなさない時代に、その作品発表の舞台を提供してくれた「ホトトギス」に対して、終生変らざる情誼を感じていたらしいが、（それは生前の子規との関係もあつて）したがって雑誌に対する漱石としての特別の因縁があるとすれば、ただ一つ「ホトトギス」のみである。が、鷗外は自分で「しがらみ草紙」などという雑誌を発行したばかりではない。弟の三木竹治との縁故もあつて、「歌舞伎」という演劇雑誌に、特別の関係を持ったり、前にも書いたように「昴」には寄稿の上

で特別の援助を与えたり、文学活動のうえになかなか野心的なところを示している。また、先にも言ったごとく西園寺公の招待を漱石は断ったが、鷗外は拘泥こだわりなく出席している。

以上のごときは、本質的な文学の仕事のうえから言えば、何のかけりもない——実はどうでもいいことかもしれないが、漱石と鷗外という二人の文学者の気質を、それ等の事実がいかにもよく反映していると思うので以上列举してみたまでである。が、そういう態度の差異が、多少この二人の文学者の作品の質的差異のうえに影響し

ているのではなかろうか？　そういう見方をすることは、文学作品を批判する便宜としても、邪道と言わなければならぬだろうか？　もちろん、それゆえにどちらが正しいとか、どちらが間違っているとか、この事実を基礎にして、そういう小批判をしようとする気持は、私には毛頭ないのである。ただ、人柄の対照を示せば足るのだし、二人の文学者の作品そのものが、けつきよく二人のその人柄を反映していることを理解されれば、それで満足なのである。

鷗外と漱石との人として、作家としての対照を説明す

るために、だいぶ多くの筆を費してしまっただが、さて問題の焦点を元に返すことにして、少くも支那事変が初まる前後のころまでは、鷗外よりも漱石のほうが一般読者層から、また専門の領域においても関心を持たれ、重んじられているようにみえていたにもかかわらず、最近二三年になってその形勢が、まったく逆転を示したごとき観があるのは何ゆえだろうか。その点が私には問題なのである。作家として、文学作品の質の点から考えて、その事実が私には納得できないものがある。理由が分らないのではない。理由はハッキリ指摘できるのだが、そ

の理由にたいして納得がいかないのである。

文学の新しい時代は、鷗外の文学に関心を持って、漱石の文学は多く省みるところがないようである。このごろ若い文学者の間において、漱石の文学について云々しているのを見るのは、ほとんど希れである——というよりも、皆無と言ってもあえて過言ではなからう。最も多く問題とされているのは鷗外であり、つづいて二葉亭四迷であり、樋口一葉であり、その他である。たまたま漱石について何か言っている人がおるかと思えば、相も変わらず生前いわゆる弟子と称して漱石の周辺を取巻いた

人々たちに限られているようである。それ等の人々が、漱石と漱石の文学とを心から畏敬して、真摯な研究の成果を発表するというよりも、言葉は悪いかもしれないが、多少師匠を喰いものにしていているというような傾向の感じられる発言が多いように思える。

このことを考えると、私は漱石のために一抹の寂しさを感じずにはいられない。いったい漱石の文学は、若い世代から関心を持たれなくてもいいほど、それほどすでに過去の作家であり、作品なのであろうか。私は機会あるごとに、よく若い世代の文学者たちに質問するので

あるが、ほとんどたいいていの人々が——十人の中の八九人までは鷗外の文学を称揚して、漱石の文学をつまらな
いと答えるのが常である。私にとってもかつては鷗外の
文学とともに漱石の文学も、あまりに高い価値を見出せ
ないというのが、少し言い過ぎであるなら、少くも私の
求むる文学の傾向とは、相当に縁遠いものであったのが
事実である。しかし、昭和十三年冬から翌十四年正月に
かけて、漱石の全作品を繰返して読破した結果、漱石文
学の偉大さに初めて頭を下げた。これこそ、明治大正文
学の最高峰であるばかりでなく、十九世紀以後の世界文

学の最も高きものと比肩しても、決して遜色のないものだということを感じた。

それ以来私は、機会あるたびに漱石文学の偉大を説くのであるが、私の説に同感してくれるのは十人中の一人にすぎない。漱石文学の真価というものは、ついに若い世代に理解されないであろうか。すべての作品が長編であることも、フランス風の短編小説によって、多く文学に親しんで来ている当代の若い文学者たちには、あるいは取りつきにくいところかもしれない。漱石文学の持つ暗さ、憂鬱さ、陰気で重くるしいところなど、軽快好

みの従来の若い世代には、あまり歓迎されないところかもしれない。漱石文学には明るさとか、気の利いた都会的趣味だとか、軽快な知性というような、つい最近までの近代人好みの要素は、少しも見出すことができない。すべてその反対であると言っている。苦渋と、執拗と、いかに解決しようとしても、どう解決するすべも発見することのできない泥沼に足を踏み込んだような人間的苦悩とがあるだけである。憂鬱で、いかんともしがたい宿命的な人間性に根ざした苦悩を、論理の展開と、心理の解剖とによって執拗に描写してゆきながら、そこに漱石

は自家独特の哲学を披瀝している。人生観、恋愛観、婦人観、家族主義、西欧文化と東洋文化に対する批判や、社会観察や——何もかもすべてを叩き込み、作品の描写の中に盛り上げている。文学の巨人が、高く秀でた広額に膏汗をにじませつつ、全力を挙げて文学と格闘し、描写と格闘している。——漱石の作品を読むと、そういう作者の悲壮な姿が、マザマザと目に見るごとくに感じられるのである。まず定刻に帰宅すると、軍帽を脱いで机に向い、チョコチョコと小説を書いた——ように感じられる鷗外の作品の明るさ、軽快味とは、好個の対照を

なしているのである。

生前漱石の文学者生活の周辺は、外見にははなはだ賑やかなものに感じられていた。その賑やかさは死後しばらくの間まで、遺族たちの生活態度や、その雰囲気などによって、かえって生前よりもさらにいつそうの賑やかさをもって持ち越されていたような印象を、少くとも外見に与えていたのは事実である。が、私は今にして考えるのに、それはただ外見だけのことであって、実際上の漱石の立場、漱石の心境というものは、実は傷ましいままでに孤独で、寂しいものであったことが分るのである。

なるほど漱石の生前には、その文学上の勢力の下に集まる有象無象が、いわゆる弟子と称する一派とともに、甘きつどに集う蟻の群のごとくに取巻いた。再び起つあたわざる最後の胃潰瘍の発作におそわれるや、数々の弟子たちは師匠のその死床に駆け付けた。かくて多くの弟子や、家族や、親近の人々に取囲まれた漱石の臨終は、まことに賑やかにして華やかなものであったのに相違ないのである。が、その実漱石自身の本当の心は、枯野の中に独り死んでゆくと同じように孤独だったに違いない。生前いかなる場合にも、——外見は賑やかに見えていても、

いつも漱石は孤独であったように、やっぱり臨終も孤独だった。生前死後に亘って賑やかにも見え、華やかにも感じられたのは、それは実はただ取巻き連中のお祭り騒ぎだけが、そう見えもすれば、また、そう感じさせもしたのであって、漱石自身としては関知しないところである。漱石は常に孤独に生き、孤独に死んでいったのだ。

——そのことを思うと私は、人間というものの骨髄からの寂しさと哀れさを、ひしひし犇々と感ぜずにはいられない。

漱石は多くの弟子を持ったことで、有名であったし、鷗外はまた弟子を持たないことで有名であった。「弟子

のない理由はなぜか」というような項目が、その当時「新潮」誌上で試みられた森鷗外論の一項目として、取り上げられているのを見ても分るだろう。——それは必ずしも漱石に弟子が多かったわけでもなければ、鷗外の弟子が、少なかったわけでもなかったのだ。ただ、漱石の弟子であると自称する人々が、世間的にガヤガヤ騒いだのに比べて、鷗外の弟子たちは、みずから弟子と名乗ることもせず、じっと沈黙していただだけである。ただ、それだけである。そして鷗外の弟子たちは、鷗外の死後今日に及んで、ようやく師匠の業績を検討し、作品を研究し

て、続々としてその成果を発表している。——鷗外の業績が最近になって、とみに華やかに印象されるのは、一つはそのせいもあるのではないか。

鷗外の業績、鷗外の作品がこの数年来、漱石文学をはるかに凌いで盛んに研究されるようになったのは、以上に挙げてきたいろいろの理由のほか、もう一つ見遁がしてはならない肝腎な点が一つある。それがことに重要な理由であると考えるのだが、それは鷗外が晩年の数年間を、文学活動のためのすべての時間と、全精力とを傾けつくして没頭したと言っているいい歴史小説である。フラ

ンス文学的傾向によって養われた若い世代の文学者たちにとつては、あたかも明るいき性的な鷗外文学が親しみやすいと同時に、この数年来新しい歴史文学に対する関心と研究が、ここではいちいち指摘しないけれども、いろいろの理由によつてしだいに高まってきた。したがつて鷗外晩年の仕事であるところの史実文学が、新しい歴史文学に興味を寄せ、関心を持つほどの人々にとつては、一応も二応も顧みられなければならないのは、当然のことである。

すなわち、一面にはそこに、鷗外文学に対する研究が

この数年来ようやく盛んになってきているところの大きな理由が潜んでいることを認めざるを得ない。それはそれでもちろんいいのであるが、しかし、その一方に漱石の文学がようやく忘れられているような観があるのは、私としてははなはだ物足りないのだ。

ここで漱石の文学について、精しく論じている暇はなくなつたし、また、そのことが目的でもない。しかし、文学の定義から言つて、また私の文学観から言つて、漱石の作品はあくまで本筋の文学であるし、世界の文学を通じて、第一流の文学であることは間違いないところだ。

ただ、文学を鑑賞する場合は、多く個人性に基づく好悪に支配されやすく、個人的嗜好がモノを言うことになるので、あるいは漱石の文学を好まない人々があるというのは、どうも仕方のないことだ。

しかしながら、ある個人がその人自身の趣味性や嗜好に基づいて、たとい漱石文学を「好かない」としても、しかしその事実が、漱石文学が第一流であるということをも毫も傷つけ得ないところだ。ことに鷗外文学と比較して考える時、漱石文学は屹然として文学の正道のうえに聳え立っていることを誰人といえども文学鑑賞の良心と

理性とにおいて、認めなければならぬだろう。——好きと嫌いとは、またおのずから別問題であるが。

（昭和二十四年六月刊、『明治大正の文学者』）

日本文学電子図書館

夏目漱石

著 者 中村武羅夫

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 別巻」角川書店

昭和42年10月10日5版発行

日本文学電子図書館